

本県におけるふん処理技術 上手に使おう 家畜ふん堆肥

3月9日(水)、新潟市・自治会館にて堆肥利用促進研修会が開催されました。畜産研究センター・小柳渉主任研究員から「家畜ふん堆肥を利用した農業生産技術について」と題した講演があり、堆肥の適正な利用による環境保全型農業の推進を図る上で、とても参考になったと感じております。

以下、講演のポイントを整理しましたので、参考にしてください。

1. 家畜ふん堆肥とは？

様々な有機物(家畜ふん+a)を微生物により腐熟させ、施用に適する性状にしたもの。


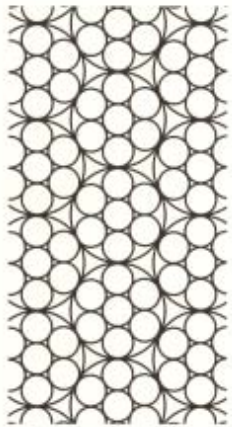
2. 堆肥利用で土づくりを！

土には「単粒構造」と「団粒構造」の2つの構造があります。

単粒構造とは、土の粒子と粒子がしっかりと並んでおり、保水性、排水性が悪いのが特徴です。一方、団粒構造とは保水性、排水性が良く、粒子と粒子に隙間があるため通気性も良く、根の生長も旺盛で元気になります。簡単に言えば、単粒構造が植物の生育に適しておらず、団粒構造が植物の生育には最も適していることになります。

家畜ふん堆肥を利用して団粒構造の土づくりをしましょう！

ただし、過剰な施用により易分解性有機物が急激に分解されると生育障害が出る可能性があるため、適正な量を施用するように努めましょう。

単粒構造	団粒構造
	
保水性、排水性(悪)	保水性、排水性(良)



3. 家畜ふん堆肥の品質(腐熟)

腐熟とは：作物に安全、人間に安全、土に優しい

安全な腐熟 = 完璧な堆肥 = 完熟

4. 家畜ふん堆肥化のメリット(腐熟目的)

- ① 水分低下、悪臭減少→流通可能
- ② 発酵熱で病原菌、寄生虫の死滅→人に安全
- ③ 有機物の安定化→作物、土に優しい

5. 腐熟評価のポイント

- ① 取り扱いが良いこと(水分20~60%、悪臭、汚物感なし)
- ② 衛生的安全性が良いこと(病原菌、寄生虫、雑草種子がないこと)
- ③ 易分解性有機物が少ないこと(急激な分解による生育障害を起こさない)
- ④ 生育阻害物質がないこと(フェノール性酸など植物生育阻害物質が分解されている)

6. 堆肥の利用目的により、重視するポイントを使い分ける

- ① 育苗：堆肥の混合割合が大きいので生育障害の影響を受けやすい
⇒易分解性有機物と生育阻害物質を重視
- ② 生鮮野菜：作物を生で食することが多い。
⇒衛生的安全性を重視

7. まとめ(堆肥の活用方法)

- ① 土壌診断・堆肥分析を実施した上で施用する。
- ② 適切な量を施用する。
- ③ 堆肥に含まれる成分を考慮して施用する。